2012 年度　研究旅行奨励制度　報告書　　15AR081 井上遥加

都市の景観について

パリ・ナント　２つの都市の比較

●はじめに

フランスには現在も美しい歴史的景観が数多く存在する。そして、その歴史的建造物に囲まれて人々は生活している。フランスでは、これらの景観を守るために景観保全に関する規制や制度を設け、国家で保護に取り組んでいる。そのこともあって、歴史的な街並み・建造物の残るパリは観光客が多く訪れる。しかし、フランスにはこのパリとは違った魅力で創造都市として歩みだした都市がある。ロワール地方の中心都市ナントである。

ナントは今でこそ年間 30 万人の観光客が訪れるが、元々は造船を主とする工業都市だった。1970 年代以降に工業の中心が移ると造船所は閉鎖され、経済状況は悪化し衰退していった。しかし 1990 年代以降は、ジャン・マルク・エロー元市長の下「文化」を一つの柱とした都市再生のプロジェクトが次々と実施され、創造都市として再スタートをきっている。また、エロー市長はこのプロジェクトの基本コンセプトとして、地域および市民の「生活の質」を高めることを挙げている。そのおかげもあってか、フランスで最も暮らしやすい都市にも選ばれている。

今回の研究旅行ではナントとパリ、ディジョンを訪れる。ナントでは、ナント市の再生プロジェクトの中心のナント島へ行き、プロジェクトの一環である「マシーン・ド・リル」を訪れる。自分の足で街を歩き、創造都市とは一体のようなものなのか確かめてくる。また、景観規制などで昔ながらの景観を守っている首都パリ、そして保存地区であるディジョンにも行くことで 3 つの都市の景観保全の動向、都市計画、また創造都市の概念について考察を深められることを期待する。

※3 つの都市のうち井上はナントとパリについて報告する。

●日程

日付	滞在地	行動・調査内容
2 月 4 日	機内泊	移動日　福岡→仁川→パリ
2 月 5 日	パリ	凱旋門～トゥイルリー公園までの景観調査
2 月 6 日	パリ	セーヌ川沿いの建造物を調査 （シテ島を中心に）
2 月 7 日	ナント	ナントを調査 （ナント島を中心に）
2 月 8 日	パリ	エッフェル塔周辺の調査 モンマルトルの見学
2 月 9～12 日 （有働に同行）	ディジョン	ディジョン市内の景観調査

2 月 13 日	パリ	午前　移動 マレ地区の見学
2 月 14 日	パリ	ヴェルサイユ宮殿における広範囲の景観規制の調査
2 月 15 日	パリ	予備日
2 月 16 日	機内泊	移動日　パリ→仁川→福岡
2 月 17 日		福岡着

●調査報告

～凱旋門から見るパリ～

まず、最初の２日間はパリで過ごした。パリに関しては「高さ」に注目して調査を実施した。１日目は凱旋門からシャンゼリゼ通りを通ってトゥイルリー公園まで歩いた。

凱旋門(高さ 50 メートル)の上に登ってパリの街を見てみると、建物の高さが一定に揃っていて、高さが規制されているのがよく分かった。この写真の奥に見える高層ビル群は、パリ近郊にある都市再開発地区ラ・デファンス地区である。ここはパリ市内と違ってマルロー法などの歴史的環境の保全制度が少ないため、経済成長に伴い再開発が計画されて高層ビルや大型施設が集中的に建設されている。

～ノートルダム大聖堂から見るパリ～

２日目はセーヌ川沿いを歩いてノートルダム大聖堂(高さ 69 メートル)に登った。

この写真は左岸を写しているが、不自然に高い高層ビルが目につく。トゥール・モンパルナス(モンパルナスタワー) である。これは 1969 年から 1972 年にかけて旧モンパルナス駅の跡地に建てられた高さ 210 メートル、地上 59

階の超高層ビルである。景観保全のために高さに規制がかかっているパリ市内では、このように高い建造物がぽつんと建っていると変に目立ってしまう。実はトゥール・モンパルナスが建設された当時、まだ高さが厳密に規制されていなかった。規制がかかった後は高い建物は建設することができないため、周りから飛び出したように不自然な様子ができあがってしまった。

～エッフェル塔から見るパリ～

エッフェル塔にも登った。エッフェル塔は思った以上に高く（最上階の展望台で高さ 276 メートル）、パリ市内の様子が凱旋門・ノートルダム大聖堂と比べてさらによく見えた。奥に見えるのはブーローニュの森である。

パリ市が現在のような姿になったのは、19 世紀後半のセーヌ県知事ジョルジュ・オスマンによるパリ市街の改造計画が元である。ナポレオン 3 世と共に推進した改造計画の当初の主な目的は、非衛生的なパリに光と風をいれることだった。そのため中世以来の複雑な路地を整理して幅の広い道路を作り、インフラなどを整備していった。また、建物のデザインを統一するなど景観の保全にも配慮がなされるようになった。

～モンマルトルから見るパリ～

モンマルトルはパリで一番高い丘にある街で、その高さは 130 メートルである。丘の頂にはサクレ・クール寺院が建っており、上に行くためにケーブルカーが設置されている。

モンマルトルの丘はパリの端側に位置しているため、高いところから見下ろすという

よりは、同じくらいの目線でパリの建物が綺麗に水平に並んで見え、いかに高さを制限されているかがよく分かった。

～ナント島～

ナントはパリ・モンパルナス駅から TGV で約２時間、フランス西部のロワール川河口に位置している、人口 29 万人の国内第 6 位の都市である。ナント再生プロジェクトの中心であるナント島に向かうために、まずトラムに乗った。このトラムは、ナントでは 1879 年から運航していたが、第二次世界大戦の影響で 1958 年に廃止された。ヨーロッパ諸国でも市内の路面電車は次々と廃止されていったが、近年地球環境や都市環境の観点からの再評価に伴い各都市で復活している。実は最初にトラムが復活したのがここナントで、1985 年にヨーロッパ諸国に先駆けて現在のような現代的な形で復活した。

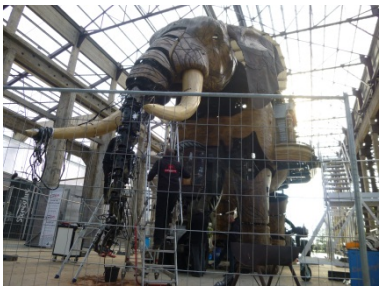
パリにいた時は、最初は全くの別世界に来てしまったかのような気分だったが、ナントはパリとは全く雰囲気が違っていて、古い街並みの中にも現代建築などがあるからか、個人的にはとても落ち着く街だった。

トラムに乗って少し経つとナント島の近くに着いた。ナント島はロワール川の中洲地区で、ナント市中心街から橋を渡った対岸に位置する。この橋もパリの多くの橋と違って、日本にもあるようなコンクリートでできていた。街灯もパリ市内でよく見かけたレトロな感じのものではなく、橋に合った現代風なものだった。ナント島は 1970 年代までナント港の中心地だったが、その所在がロワール河口に近い

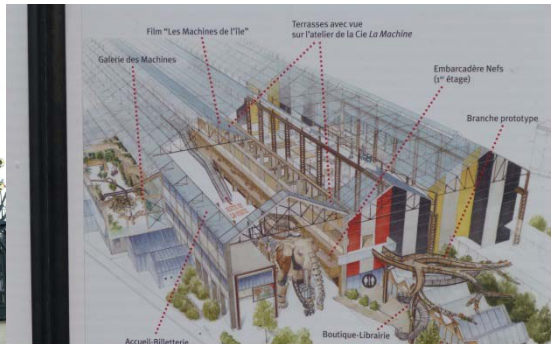
サン＝ナゼールに移り産業が衰退した。2001 年より、ナント再開発の中心地として選ばれた。

ナント島に入ってすぐ右に見えるのが「レ・マシーン・ド・リル」である。ここは元造船所で、現在はフランソワ・ドゥラロジエールとピエール・オレフィーチェが、劇団やショーのマシンを作っていた技術者や彫刻家、建築家、クリエーターと共に立ち上げた団体「ラ・マシン」によってプロデュースされている遊園地兼アトリエである。2002 年にナント市がナントの再開発プロジェクトを打ち出すとこれに参加し、活動拠点をここに移して 2007 年にオープンした。残念なことに今回の滞在期間中は閉まっていたのだが、見学はできるということだったのでアトリエ内を見学した。

ここの一番の目玉は機械仕掛けの巨大な象だ。アトリエ内に入ると奥の方にいた。この象は高さ 12m、幅 8m、重さ 50t で、最大 49 人を乗せて島を練り歩く。ただ歩くだけではなく、鼻から水を撒き散らすこともできる。私が訪れた日はこの象のメンテナンスのようなことをしていた。近くで見ることができたが、表面が木でできていて、象の乾燥したひび割れた皮膚の様子も再現されていて、本当に物語の絵本から飛び出してきたようだった。



この象以外にもアトラクションはある。海の生物のメリーゴーラウンドもその一つだ。ナントは『15 少年漂流記』『80 日間世界一周』『海底２万里』などの作者ジュール･ヴェルヌの出身地でもある。ここのアトラクションはこの象をはじめ彼の作品をテーマにしているため、彼の作品の不思議な世界観を体験することができる。このようなプロジェクトができるのも、元々工業都市だったからこそである。



また、この「レ・マシーン・ド・リル」の周囲にも元造船所の構造が様々な形で保存されていた。

「レ・マシーン・ド・リル」の見学を終えて、ナント島を散策してみた。これらの写真から分かるように、ナント島にはとても現代的な建物が多く、個人的に福岡の百道を歩いているような印象を受けた。また、ナント島に限らずナント市は全体的に緑が多く、かつての工業都市から「緑の島」へと転換するプロジェクトが現在も進行中であることが確認された。

●まとめ

今回の研究旅行でパリとナント、２つの都市を訪れた。パリの街は昔ながらの建物が

所狭しと並んでいて、高さも一定に保たれているため、ぎゅっと濃縮されているというか、街を歩いていて個人的に少し閉塞感を感じた。しかし、街全体を高い場所から見ると、建物の向きや高さが揃っていて、道路も曲がることなくまっすぐ伸びており、きっちりと都市計画が進められたことが分かった。

ナントの場合は、もちろん古い建造物もあるが現代的な建物も多く、モダンな印象を受けた。ナント島プロジェクトに関しては、今回の滞在では「レ・マシーン・ド・リル」に焦点を当てて調査したが、この他にも街中にオブジェが設置されてあったり、文化や芸術のイベントなども頻繁に行なわれている。また街全体に緑が多く川沿いの道にも芝が広がっており、ジョギングしている人、散歩している人も多くいた。個人的に暮らしの中に文化や芸術、自然が共存している様子が近未来的に見え、この街で暮らしたいと思えた。

このような文化による都市再生はここだけでなくたくさんの国や都市で取り組まれている。

近年、文化のもつ創造性に着目して、自由で創造的な文化活動とインフラインストラクチャーの充実した都市が増えつつある。これらの都市を一般的に「創造都市」と呼ぶ。『創造都市への挑戦』（2012）の著者である佐々木雅幸氏は、本書の中で創造都市について

“創造都市とは人間の創造活動の自由な発揮に基づいて、文化と産業における創造性に富み、同時に、脱大量生産の革新的で柔軟な都市経済システムを備えた都市である”

“21 世紀に人類が直面するグローバルな環境問題やローカルな地域社会の課題に対して、創造的問題解決を行えるような「創造の場」に富んだ都市”

と定義している。この創造都市という考え方にユネスコも注目しており、ユネスコ創造都市ネットワーク事業も始まっている。

ナントは創造都市として再スタートをきったが、ナントを実際に訪れたことによって、創造都市とはただ街を創造性によって作り変えるのではなく、そこに暮らす人々の暮らしの質も考えて街作りが行なわれている都市だということが分かり、またナントが目指している「市民の生活の質を高める都市」についても学ぶことができた。

最後に、今回この研究旅行奨励制度に参加させていただき、とてもいい経験になりました。出発当日に飛行機が遅延して空港内を激走したり、荷物が届かなかったりとハプニングこそありましたが、現地の方々にも助けていただきながら、無事に研究旅行を終えることができました。国際文化学部の先生方をはじめとする関係者の方々にお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

参考文献

『創造都市への挑戦』　佐々木雅幸　岩波書店

『フランスの景観を読む　保存と規制の現代都市計画』　和田幸信　鹿島出版会

参考 URL

http://jp.franceguide.com/%E5%9F%BA%E6%9C%AC%E6%83%85%E5%A0%B1/home.html?NodeID=124

http://www.jpf.go.jp/j/about/survey/creative/pdf/euro_03.pdf